

2019/02/17

## 「戦うべき敵」

「いばらの中に落ちるとは、こういう人たちのことです。みことばを聞きはしたが、とかくしているうちに、この世の心づかひや、富や、快樂によってふさがれて、実が熟するまでにならないのです。しかし、良い地に落ちるとは、こういう人たちのことです。正しい、良い心でみことばを聞くと、それをしっかりと守り、よく耐えて、実を結ばせるのです。」(ルカ 8:14-15)

「種まきのたとえ」は、イエス様が唯一解説した最も重要なたとえ話です。イエス様は、このたとえで、御言葉を受け取る心の状態によって、実を結ぶかどうか変わることをご教えます。「良い心で御言葉を聞く」とは、神と自分との間に何も置かないことであり、「よく耐えて」とは、神の前に沈黙することです。

パリサイ人は、神さまと自分との間に立派な行いをもってきました。私たちも同様に、神様からの御言葉を受け取る前に、世の心づかひや富や快樂を優先してしまいがちです。その結果、御言葉がふさがれてしまって、神様からの慰めを受け取ることができず、平安という実を結ぶことができないのです。

### ■世の心づかひとは

イエス様は、神の恵みを邪魔するもののトップは「この世の心づかひ」だと言われました。それは、何を指すのでしょうか。

実は、「この世の心づかひ」という訳ですが、新改訳聖書の第三版まではそのように訳されていましたが、残念ながら現在は、「人生の思い煩い」という言葉に改訳されてしまいました。他の日本語訳の聖書も、みな一様に「人生の思い煩い」といった意味に訳しています。しかし、これは正確な訳ではありません。患難や苦しみによる人生の思い煩いは、神と私たちを結び付けることができます。しかし、イエス様は「みことばをふさぐもの」という意味で、この言葉を使っておられますから、「世の心づかひ」のほうが実際の状況を正しく表しているのです。それは、このことを語った直後にイエス様が言われた言葉から知ることができます。

「さて、彼らが旅を続けているうち、イエスがある村にはいられると、マルタという女が喜んで家にお迎えした。彼女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた。ところが、マルタは、いろいろともてなしのために気が落ち着かず、みもとに来て言った。「主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。私の手伝いをするように、妹におっしゃってください。」主は答えて言われた。「マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。」

(ルカ 10:38-42)

イエス様がマルタに言われた「いろいろなことを心配して気を使っている」とは、「世の心づかい」と同じ言葉です。この時マルタは、おもてなしに気を使って、手伝わぬマリヤに対してイライラしていました。「人生の思い煩い」とは、少しニュアンスが違うことが理解できると思います。

マルタは一生懸命おもてなしをしましたが、イエス様がマリヤばかり見て自分に目を向けてくれないことに不満を抱きました。イエス様はこのことについて「あなたは人から愛されようとしている」と指摘なさったのです。これが世の心づかいです。

おもてなし自体が悪いわけではありません。しかし、聖書は「愛がなければどのような行いも意味がない」と語っています。愛とは神を信頼する心です。もし何かをする時、「良く思われたい」「自分を愛してほしい」という期待があるなら、それは神を信頼しているとは言いません。イエス様が指摘する「世の心づかい」とは、人から良く思われたいという見返りを求める心のことです。その心がある限り、神からの慰めを受けることができないのです。マルタはこのことに気づきませんでした。あなたはどうでしょうか。

## ■人からの評価を気にしたペテロ

「それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた。しかも、はっきりとこの事がらを話された。するとペテロは、イエスをわきにお連れして、いさめ始めた。しかし、イエスは振り向いて、弟子たちを見ながら、ペテロをしかって言われた。「下がれ。サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません。自分のいのちを買い戻すために、人はいったい何を差し出すことができるでしょう。このような姦淫と罪の時代にあって、わたしとわたしのことばを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます。」(マルコ 8:33-38)

ここまでのイエス様は、神の国についてわかりやすく教え、多くの病人をいやしてあげたので、人々から大変慕われていました。ところがこの頃から、ご自分がこの地上に来た目的を公然と語り始めました。

今あなたが、誰かから「私はこれから殺されるが、3日目によみがえる」と言うのを聞いたらどう思うでしょうか。「この人、おかしいんじゃないか」と思うのが普通です。

ペテロは、イエス様がそのように言うのを聞いて、「そんなことを言ったら、みんなからお

かしな人だと思われてしまう。みんなから良く思われなくなる」と心配しました。そのため、「そんなことを言うてはいけません」とイエス様をいさめたのです。

その時、イエス様はペテロに対して「下がれ、サタン」と言われました。イエス様が人に対して「サタン」と言ったのは初めてです。ペテロのしたことはそれほどまでに神に反する行為だったのです。

「死んでも甦る」、これは、最高の福音であり、慰めです。いくら病気が癒されても人はいつか必ず死にます。ですから、死んだあとに希望があるということは素晴らしい慰めです。それをペテロは、人から良く思われたいというこの世の心づかいによって、排除したのです。人から良く思われようとすればするほど、神のことばを排除することになり、慰めを拒否することになります。ペテロは、神と自分との間に「人からの称賛」を持ち込み、それが神のことばをふさいだのです。

ペテロはすべてを捨ててイエス様についてきましたから、自分は神の前に立っていると思っていました。しかし実際は、人の目の前に立ち、人から良く思われようとするところに立っていたため、神のことばが入らなかったのです。人が認めてくれる神のことばには喜んで従っていましたが、死んだ人が生き返るなどという他の人が拒否する神のことばは、心に入らなかったのです。

「人から愛されたい」「良く思われたい」という「この世の心づかい」は、巧妙に私たちに神から引き離します。私たちは、この世の心づかいと戦わなければならないのです。

## ■アブラハムの信仰・ノアの信仰

信仰の父と呼ばれるアブラハムの偉大さについて考えてみましょう。アブラハムは神を信頼し、幼い一人息子を殺す決心をしました。それだけでも偉大な信仰ですが、実はそれ以上に彼が戦わなければならなかったのは、この世の心づかいなのです。

もし、誰かが自分の子を殺そうとしていたら、私たちは全力で止めようとするでしょう。もし、我が子を手にかけて殺した人がいれば、激しく非難するでしょう。アブラハム自身は、神がイサクを救ってくださると信じていましたが、常識で考えれば、我が子を殺すなどとてもないことです。神の言葉を信じるとは、まさに世の心づかいとの戦いなのです。

アブラハムの信仰の偉大さは、人々から何と思われようが、それと戦ったということです。アブラハムはまだ神様がイサクを助けてくださることを知りません。自分が手にかければこの子は死ぬということしかわかっていないにもかかわらず、神の言葉に従えば、神は必ずこの子を救ってくださると信じる信仰は確かに偉大です。しかし、彼が本当に葛藤して戦ったのは、世の中の倫理を超越することです。信仰を妨げるのは、人から良く思われたいという思いです。彼はそれと戦い、人から悪く思われることすら良しとしたのです。

旧約聖書の中で、世の心づかいと戦ったもう一人代表的な人物はノアです。ノアは、神様から「大洪水が起きるから箱舟を作るように」と言われ、長い時間をかけて言われた通りにコツコツ作り上げました。水辺でもないのにこんなに大きな船を作るなんて、人々からは物笑いの種です。しかし、彼は人からどう思われようとも、世の心づかいに勝ちました。

神の言葉を信じるとは、世の心づかいに勝つことです。私たちが神の言葉に従えないのは、

世の心づかいが邪魔をするためです。この世で称賛される内容なら従えても、そうでない御言葉に対しては、「そんなことをしたら、人から何と思われるか」と尻込みしてしまうのです。私たちが世の心づかいに生きる限り、神のことばは後回しになり、聖書の話は人が納得できる道德倫理のただのイイ話に格下げされてしまいます。しかし、それは死の恐怖におびえて生きている私たちの慰めにはなりません。神は、死んでもよみがえることを教えています。たとえ世の中から非難されても、バカにされても、神のことばを信じるとは、世の心づかいとの戦いなのです。

## ■世の心づかいと戦うチャンス

イエス様が問題とされている「世の心づかい」は、現代の心理学では「承認欲求」と呼ばれています。聖書学者であり、心理学者でもあるアドラーは、承認欲求によって苦しめられている私たちに対して「嫌われる勇気」が必要だと述べました。すべての問題の原点は、「人に良く思われたい」という一点にあります。なぜなら、それによって神と私たちの間に他のものが入ってくるからです。イエス様がこの地上に来られた目的は、私たちを慰めるためです。私たちがその慰めを受け取れない最大の理由は、人の慰めを得るからです。神の慰めを受け取るために、どのようにして世の心づかいと戦えばいいのでしょうか。

### 1. 失敗した時

失敗して、周りの人から良く思われなくなり、もう自分は終わりだと思う時がチャンスです。それまで神との間にあったものがなくなり、世の心づかいに生きることが出来なくなってしまうからです。その時人は、神の前に助けを求めることしか出来ません。

例えば、姦淫の現場で捕まり、隠したかった罪が公にさらされた女性が良い例です。彼女はその場でどんなに頑張っても、人から良く思われることはありません。自分ではどうすることもできなくなった時、魂は「神よ、私をあわれんでください」という叫びをあげるのです。その時イエス様は、「私はあなたを裁かない」と言って、赦し、慰め、励ましてくださるのです。

### 2. 患難に出会った時

聖書の中で、患難に出会ったことで有名なのはヨブです。神にも人にも誠実に生きていたヨブは、ある日突然家族も財産も失い、ひどい病に襲われます。仲の良かった友だちもヨブを腫れ物に触るように扱い、人々は彼から去って行ってしまいます。

この時こそ、神に祈って神の慰めを受けるチャンスです。世の心づかいを患難が排除してくれるこの時、神は患難を静観なさいます。こうして神との間に置かれていた様々な邪魔なものが排除され、私たちは神と直接つながれるようになり、魂が神を求めて叫ぶことで、人は神の慰めを知ることができるようになるのです。

### 3. 自分と向き合う

失敗や患難はいつ訪れるかわからないものですが、私たちはそれを待つ必要はありません。

私たちは日頃人にどう思われるかばかりを気にして、自分を見てはいないものです。自分の心を見つめてみましょう。人に嫉妬し、情欲を抱き、お金を求め、不安がいっぱいで見える安心をむさぼっている、矛盾に満ちたひどい状態であることに気づけば幸いです。聖書は、そのような状態を「獣」あるいは「虫けら」と呼んでいます。このひどい状態を目の当たりにしたら、私たちは絶望するしかなく、神に助けを求めるしかありません。

ですから、絶望こそがあなたを自由にするのです。自分の現状を見つめることが出来れば、今まで持っていた世の心づかいなど何の役にも立たないものであることに気づきます。神の赦しか考えられなくなり、人に何と思われようと関係なくなってしまうのです。

私たちを本当の意味で自由にするのは、自分自身を見て絶望することです。そうすれば、必死になって神の助けを乞うことでしょう。闇の中、絶望の中にこそ、神の光は輝くのです。

### ■ 苦しみを回避するな

失敗したり、患難に出会ったり、自分と向き合ったりすることは、つらいことです。そのため、多くの人がこの苦しみを回避しようとして、世の心づかいと戦うせっかくのチャンスを棒に振ってしまいます。

富に慰めを求めたり、快樂で不安を紛らわそうとしたり、何かに熱中して頑張り、その自分を見て慰めを得ようとしたり、あるいは反対に、どうせ自分はダメな人間だと開き直ったり言い訳をしたり、これらはどれも苦しみを回避しようとする行動なのです。

しかし、せっかくチャンスを手にしたのですから、苦しみを回避するのではなく、神のことばを食べ、神からの慰めを受け取りましょう。私たちを本当に慰めることができるのは、神のことばしかありません。神のことばを食べるために必要なことは、神との間に何も置かないことです。聖書に登場する神からの慰めを受け取った人々は、すべてを失い、誇るものがなくなり、神との間に置くものが何もなくなってしまったからこそ、神は彼らを引き上げることができたのです。だからイエス様は、罪人や病人といった苦しみの中にある人々と交わったのです。彼らは、何を頑張ろうとも偏見によって悪く言われてしまいます。人からの評価を得られない彼らは、神との間に何も置くものがなかったのです。

イエス様は私たちを引き上げて、本当の慰めを与えたいと願っておられます。そのために、世の心づかいや富の惑わしや快樂を、私たちの中から取り除いてほしいのです。その中で最強の敵は世の心づかいです。人から愛されようとする思いと戦いましょう。そうすれば、神のことばが食べられるようになります。神がなさることは、すべて私たちの常識の範疇に収まらないことばかりです。そんなことを信じていると言ったら、人からどう思われるだろうといった世の心づかいを捨てた時、私たちは神からの慰めを受け取ることができます。人からの慰めと神からの慰めの両方を受け取ることはできません。神からの慰めを受け取ることを求め、真の弟子となりましょう。